

「西洋音楽」演奏のグローバル化—音楽は「普遍的な言語」か？

半澤 朝彦

「音」という直接的な身体感覚は、人間の生活・社会・ものの見方に大きな影響を及ぼす。波の音や風の音、鳥や動物の鳴き声、といった環境音は人間を取り巻く風土条件の基礎をなすであろうし、軍の統率にラッパやほら貝が不可欠なこと、宗教と音楽との密接な関係、国歌とナショナルリズム、CDの販売と著作権、資本主義といったテーマを考へても、政治・経済・社会的に「音」にはきわめて重要な意味があることは明らかである。ところが、音には瞬時に消え去る性質があり、紙の上に保存可能な思想や文学、あるいは絵画や料理と比べてもやや研究対象としにくい。音楽学も、スタティックな楽譜の研究が伝統的に主流であり、演奏や身体性については後手に回っている。

たしかに、たとえば人類学においては音楽や芸能は重要なテーマであり、また、話し言葉を（当然のこととして）音として捉える必要性を言語学者は認識している。音楽と言語の密接な関係は、音楽演奏家によって常に指摘される。さらに、スポーツや舞踏といった実技活動に関する社会学的な研究では、身体的な動きや感覚がもつ社会的意味が主要な問題となる。しかし、音と音楽に関しては、さまざまな理由から、実技、身体性に重点を置いて学際的に考察されることは少なかった。実際には、音感、テンポ感、リズム感、音程感覚、構成感、美意識などは、芸術音楽の世界を超えて個人や社会を規定する力があるため、非常に広い視野でアプローチする必要がある。その意味で、今回の報告は、当研究所のプロジェクト「音楽とグローバル化」を開始するに当たっての貴重な予備的考察・討論の機会となった。

本報告では、日本のケースを中心に、現在のわれわれを取り巻く「意味のある音」が、かなりの部分、帝国主義とグローバル化によって、明治以降に西洋から伝播したことを確認する。その意味では、音楽が「誰にでも分かる」「人類共通の言語」「普遍的なもの」であるとは言いがたい。幕末明治以来の政策的な洋楽導入が、近代国家建設と富国強兵を明確に目的としてきたことについては、かなりの先行研究がある。第二次世界大戦後、現在にいたっても、われわれの耳に否応なく入る「意味のある音」には、日本が国際的に適応しようとする意識的・無意識的な努力の中で摂取したものが圧倒的に多い。

とはいえ、報告者の今回のポイントは、帝国主義やグローバル化の中では、かならずしも「ソフト・パワー」の一方向的押し付けだけが生ずるわけではなく、また、「意味のある音」自体の定義が時間の進行に応じて常に複雑に変容し続ける、という点である。一部に非常に崇拝者を生む一方で、帝国主義的なイメージをも持たれかねない「西洋クラシック音楽」の分野においても、顕著な双方向性・多方向性が認められる。たとえば、クラシック音楽の演奏家は、日本が文化面において、おそらく第二次世界大戦後、最も早い時期に「国際化」「グローバル化」を果たして世界に進出した分野なのである。

音楽は、平和構築や異文化コミュニケーションに不可欠との指摘もある。本稿の直接の範囲を超えるが、単に外国人と一緒に歌を歌ったり、紛争地で慰問コンサートを催したり、ハコモノ援助でコミュニティ・ホールを建設したりする以上の役割を音楽は果たせるはずである。音楽に「普遍的な」価値を付与できるかどうかは、われわれの意識と行動にもかかっている。